

Learning Learning

JALT Learner Development N-SIG Forum vol.3. no.2. October 1996

This issue of *Learning Learning* is of transitional nature. Sumiko Taniguchi, who will be a co-editor starting with the next issue, arranged and edited the Tokyo Spring Conference reports. Steve Cornwell, the other incoming co-editor, contributed with his extremely efficient copy editing skill. The Action Workshop reports are a fruit of collaborative editing over e-mail by Andy Barfield, Cheiron McMahon, Richard Smith and Naoko Aoki. Through this process we learned that doing the volunteer work for the Learner Development N-SIG is part of the process of our own development. This awareness might have led Andy, as joint recording secretary, to write the revolutionary AGM agenda for JALT 96 with Hiroyuki Izawa, the other joint recording secretary. It is also reflected in our decision to open up *Learning Learning* to information and discussion on organizational matters. We have also become more conscious of ourselves as L2 users and issues in bilingualism. In the process of the editorial discussion, Andy, Richard, Cheiron and Steve started writing e-mail messages in their L2 to join Japanese speaking committee members who had been doing so for a while. Some of these L2 e-mail messages have been included in this issue together with JALT 96 related announcements and committee members' reports written by L2 users. There is also a new column, Teachers as Learners, in this issue which exclusively focuses on our learning to replace *Learner to Learner*. We hope you enjoy this issue, and ones to be put together by Sumiko and Steve in the future with column editors they are planning to have.

On behalf of everyone involved in the creation of this issue,
Naoko Aoki and Richard Smith

『学習の学習』は変化の時を迎えました。この号では、次号から編集係となる谷口すみ子が、JALT東京支部春季大会の報告をまとめて編集し、同じく次号からの編集係、スティーブ・コーンウェルが原稿の最終編集に彼の専門的技術で貢献しました。アクション・ワークショップ報告は、アンディ・バーフィールド、カイロン・マクマヒル、リチャード・スミス、青木直子がe-mailを通じて、共同で編集したものです。この作業を通して、私たちは学習者ディベロプメント研究部会でのボランティア活動が、私たち自身の成長の過程の一部であることを学びました。アンディが書記として、もう一人の書記、井沢広行氏と共同で、革命的な年次総会議事提案を書いたのは、おそらくそのせいです。また『学習の学習』に研究部会の運営に関わる情報や議論を掲載しようとしたことの背後にも、そうした気づきがあります。第二言語使用者としての自分、そしてバイリンガリズムに関わる問題を、前よりも意識するようにもなりました。E-mailを使って編集についての相談をする中で、アンディ、リチャード、カイロン、スティーブは、日本語でもメッセージを書き始めました。こうして第二言語で書くのは日本語話者の委員会メンバーだけではありませんでした。これらのe-mailのメッセージの一部は、この号の中に引用されています。JALT 96関連のお知らせ、委員会メンバーの年間報告の中にも第二言語で書かれたものが数多く含まれています。さらに、廃刊となった*Learner to Learner*に代わるものとして、私たち自身の学習に焦点をあてた「学習する教師」というコラムも新設しました。読者の皆さんが、この号を、そして谷口さんとスティーブが、新しく『学習の学習』に参加してもらう予定のコラム編集係と一緒に作る、これからの『学習の学習』を楽しんでくだされば、幸いです。

この号の創造に関わったすべての人たちを代表して
リチャード・スミス、青木直子

JALT東京支部春期大会の報告/Tokyo JALT Spring Conference

JALT東京支部春期大会が、1996年2月25日(日)、文京女子短期大学で開催されました。学習者ディベロップメント研究部会は、日本語教育研究部会と共同で、漢字の学習と教育をテーマとした分科会を行いました。また、学習者ディベロップメント研究部会のメンバーによる発表も数多くありました。以下、発表の内容を報告します。

The Tokyo JALT Spring Conference was held at Bunkyo Women's Junior College on February 25th (Sun.), 1996. The LD N-SIG and JSL N-SIG jointly organized a strand of presentations on kanji learning and teaching. There were also many other presentations by LD N-SIG members.

1. 漢字の学習と教育

- 1) 漢字の論理と漢字の指導の論理 (西口光一)
- 2) 教師、力関係、漢字 (ステイシー・タービン)
- 3) 語彙としての漢字—その教育と学習— (浜田盛夫)
- 4) 怠け者の学習者のための漢字 (リチャード・スミス)
- 5) パネルディスカッション

西口氏は漢字の論理を明らかにし、それを漢字教育の観点から検討した。そして学習者の能力発達の観点を重視した漢字教育へのアプローチを提唱した。タービン氏は漢字学習に関する自分の経験を振り返り、語学教師が学習者に与える正または負の影響力の大きさについて指摘した。浜田氏は漢字を語彙として捉えるという観点から、漢字学習と教育を考え直す提案を行い、入門期の漢字指導例も紹介した。スミス氏は日本語学習、特に漢字学習について自分の経験を語った後、いくつかの漢字教材を検討し、参加者と意見交換を行った。パネルディスカッションでは、発表者と参加者がいっしょに漢字学習と教育について活発に意見を交換した。そのうちのいくつかを紹介する。

*漢字学習は孤独な作業のように思えるが、グループを作って共同学習をすることも可能だろう。

*現行の漢字教育シラバスは、学習者の発達段階に沿って作られていない。

*漢字の効果的な学習のためには、学習者自身が自分の学習スタイルをよく知って、それにあった学習ストラテジーを工夫することが大切である。

*漢字学習のためのリソースを共有する必要がある。

以上要約すると、漢字教育の質を高めるためには、学習者と教師、また日本人教師と外国人教師の間のさらに密接な協力関係が必要とされていることが改めて認識された。

(報告: 谷口すみ子)

2. 学習者ディベロップメント研究部会メンバーの発表

1) 漢字が楽しくなる

イブリン・ササモトとイトウ・シノブ

漢字は非常にしっかりとしたシステムを持ち、グループとしてつながっている。しかし、今までの漢字教育においては、このシステムが明らかにされず、個々ばらばらの漢字を丸暗記するしかなかった。イブリン・ササモトとイトウ・シノブは、基本的な漢字のシステムを体系化して示し、これを理解することによって漢字を遊びやゲームから学ぶ方法を紹介した。発表では、不思議なブラック・ボックスや絵カードを使ったかるた、あわせ漢字ビンゴゲームなどがデモンストレーションされた。

(報告: 臼杵美由紀)

2) リーダー・リスpons理論に基づいた言語意識のトレーニング

バリー・マティア

本発表は日本の中学、高校の生徒に対する、読み物への反応に基づいた言語意識のトレーニングの紹介である。生徒は宿題としてリーダーを読み、理解が困難だった点、言語形式や内容などについての疑問点を記録し、教室では小さいグループで各自の記録を持ち寄り、話し合いを行う。このアプローチにより、生徒は英語の文法、意味、用法にもっと目を向けるようになり、教師にとっても新しい気づきを提供した。

(報告: 谷口すみ子)

編集係注: このトレーニングについては *Learning Learning* 3/1にも記事が載っています。

3) 外国語学習におけるストラテジー使用

ロビン・L・ナジャー

外国語としての英語教育におけるストラテジー教育は、思考様式や学習タスク処理方法、問題解決手段等を活性化させる点で、とても意味のあることである。また、“ストラテジー”という言葉は、もちろん言語教育においては今や「流行言葉」となっているが、学習ストラテジー教育の重要性とその必要性は明らかに高い。現在英語を教えている大学生を観察してみると、言語運用能力の低いことは言うまでもなく、それ以前の目標言語の学習方法すら満足に知らないことが多

い。学習者ストラテジー使用に関して、2つの疑問を投げかけてみたい。第一に、外国語学習者は、学習ストラテジーのレパートリーをすでに持ち合わせているのだろうか。第二に、学習者はどの程度、学習場面でストラテジーを応用しているのだろうか。発表者の研究目的は、この2点について、言語学習におけるストラテジー使用の有効性を検討し、学習者がいかにストラテジーを実際の学習場面で使用しているかを考察することにある。そして、学習者が母語で運用しているストラテジーを外国語学習の際にも応用・運用することが大切で、外国語学習におけるストラテジーの存在と使用をもっと認識することが重要であると考え。 (報告：伊東祐郎)

4) 語彙学習のための記憶ストラテジー指導

後藤美納江

本発表は、高校と大学の英語の授業において、語彙学習のために記憶ストラテジーを教えることは可能かどうか、またそれは記憶の保持に効果があるかどうかを調査した報告である。調査の結果は、ストラテジー指導の有効性を示唆するもので、学習者の反応も概ね積極的であった。ただし、新しいストラテジーを採用するには充分時間をかけること、このようなストラテジー教育の目標を明確にすること、そして学習者自身の持っているストラテジーに対しても配慮することを忘れてはいけないであろう。 (報告：後藤美納江)

5) 学習者の自律性を意識づけるために：言語学習日誌をもとに

臼杵美由紀

本発表は、日本の大学レベルの英語学習者の自律性確立への試みの実践報告である。発表者は、授業に学生を主体的に関わらせるために、母語による言語学習日誌を取り入れ、学生個々との対話を通じて自律への働きかけを行った結果、学生の英語学習への自律性が高まったことを報告した。この実践の過程で発表者が、学習者をコントロールしようとする「学習者トレーニング」というスタンスから「教師も学習者のひとりで学習過程を学習者と共にする」というスタンスに変わっていったことは今後の展開の新しい局面を提示した。学習者同士の働きかけも含めて教師主導型から学習者中心の語学学習への展開を基本に考えていく発表者の姿勢がよく伝わった発表である。 (報告：野沢 智子)

3. JALT東京支部春期大会に参加して

臼杵美由紀

「教師は、どの程度学習者のフラストレーションを把握しているだろうか？」2月25日に行われたJALT東京支部春期大会における漢字の学習と教育の発表は、日本語教師の一人として過去を過ごしてきた私にそんな疑問を投げ掛けた。

学生は、日常の学習の中で、自分の問題を訴えかけてくることがある。その時、我々教師は、どのような対応をしてい

るだろうか。その訴えを教師は、どのくらいの深さで感じることができているだろう。本当に学習者中心・学習中心を考えているのなら、教師は教師としての視点をまず取り去って、学習者の声を聞く耳を持たなければならないと思う。教師としての視点に立った様々な理論よりも、実体験から得た学習者からの正直な訴えは、教師としての私の内面に大きく響いた。もっともっと学習者の真の訴えを聞きたい。そしてそこから学びたい。私は、外面は教師として教える役割を演じているが、内面は、実は目の前にいる学生からもっともっと学びたい学習者だと思う。

私は、ある日本語学習者達と日記のやり取りを試みている。初めは、日記を自律性向上の学習者トレーニングとして考えていた。そしてそのつもりでスタートした。しかし、学習者が自らの内面を表現してくるその日記から様々なことを学んでいるのは、実は、この私だということに気が付いた。今、私は、あくまでも教師の考えを主体とした学習者へのトレーニングのあり方に疑問を抱き始めている。教師と学生が学習過程を共有し、お互いに困難やフラストレーションを感じ合う。そして、その解決に向かって、一緒にゴールを設定していく：教師・学生の立場を越え、お互いにわろう、学ぼうとする意識（教師・学生双方が、学習者としての意識を持つこと）が必要だと思う。学習におけるコンピューター導入がますます大きくなる流れにあえて逆行して、人間にしか解決できない部分にもっと目を向けてみたい。

*Learning Learning*に、日本語学習者からの生の声がたくさん掲載されることを期待しています。

☆☆☆

1. Strand of presentations on kanji learning and teaching

- 1) Logic of kanji and logic of kanji instruction (Koichi Nishiguchi)
- 2) Teachers, power and kanji (Stacy Tarvin)
- 3) Kanji learning and teaching as vocabulary learning and teaching (Morio Hamada)
- 4) Kanji for lazy learners (Richard C. Smith)
- 5) Panel discussion

Nishiguchi examined the logic of kanji and its possible application to kanji teaching. He introduced the developmental nature of learners' kanji knowledge and skills and proposed a new approach to kanji teaching.

Tarvin reflected on the kanji instruction she had experienced in the past and discussed how language teachers have the power to positively and negatively influence their students.

Hamada focused on the idea of kanji as vocabulary and discussed its implication for kanji learning and teaching. He also introduced activities for an introductory kanji class.

Smith started his presentation by sharing his own experience as a Japanese language learner, especially regarding kanji learning. Then he reviewed some kanji teaching materials and exchanged ideas with participants.

During the panel discussion, participants were invited to share their own ideas for learning and teaching kanji with others. Among many questions, suggestions and opinions, here are some examples.

*Kanji learners are not alone. They can learn together as a group.

* Kanji teaching syllabi (if any) at present are not based on learners' developmental stages.

*For efficient kanji learning, utilizing various learning strategies based on the learner's own learning style is essential .

*Kanji learning resources should be shared with other learners.

To summarize, it was realized that there is a need for more cooperation among teachers and learners, and between native and non-native Japanese language teachers in order to improve the quality of kanji instruction.

2. Presentations by LD N-SIG members

1) Fun and Games with Kanji

Evelyn Sasamoto and Shinobu Ito Presenters focused the systematic nature of kanji and its inter-relatedness to one another. Traditional kanji instruction neglected this nature of kanji and rote learning of individual kanji was emphasized. Sasamoto and Ito presented a new approach to kanji as a system and demonstrated games and activities (magical black box, kanji picture cards and bingo) which aid the memory in linking kanji and kanji components together.

(reported by Miyuki Usuki)

2) Reader response-based language awareness training

Barry Mateer This presentation introduced a reader-response approach to language awareness training for Japanese junior/senior high students. Students are asked to read graded-readers at home and write down questions

they have on language forms and contents. In class, students work together in a small group to pose and answer questions. Students are encouraged to become more aware of grammar, meaning and use, at the same time this approach has given new insights to the teacher.

(reported by Sumiko Taniguchi)

Editor's note: Learning Learning 3/1 has Barry's article on this topic.

3) Strategy Use in Foreign Language Learning

Robyn L. Najar

The word "strategy" has become a buzz word now. Indeed, the need to offer strategy instruction to the students is apparent. It has the benefit of activating thinking, ways to approach learning tasks to solve problems. Many college students have limited FL skills, and furthermore, lack skills in the area of "how to learn." The purpose of this study was to consider strategy use and how FL learners apply learning strategies in the context of FL learning. The following two questions were posed: (1) Do FL learners already have a repertoire of learning strategies? (2) To what extent do they apply these strategies in FL contexts? It is important for FL learners to be more aware of various strategies they use in their first language, and to apply these to their FL learning experiences.

(reported by Sukero Ito)

4) Memory strategy instruction for vocabulary learning

Minae Goto

The presenter discussed an informal experiment which was carried out to examine the possibility and effectiveness of memory strategy instruction for vocabulary learning in high school and university settings. The results suggested that such instruction was effective, and reaction from the learners was generally positive. However, the presenter noted the importance of factors such as reserving sufficient time for students to adopt new strategies, and emphasizing the goal of strategy instruction clearly while showing respect for the learners'original strategies.

(Reported by Minae Goto)

5)Improving Awareness for Learner Autonomy through Diary Writing

Miyuki Usuki

This presentation focused on classroom research conducted in Japanese university English classes for promoting learners' awareness of autonomous learning. The presenter addressed the usefulness of diary writing in learners' native language as a medium of personal communication between a teacher and

of personal communication between a teacher and learners in terms of improving learner autonomy. In the course of diary writing, it was observed that the teacher's attitude changed from "learner training" to "teacher as a co-learner". This shift from teacher-centered to learner-centered approach was quite remarkable in this presentation.

(Reported by Tomoko Nozawa)

3. My reflections on Spring Conference

Miyuki Usuki

To what degree do Japanese teachers understand their students' frustrations? Even as an experienced Japanese teacher, a series of presentations on Kanji learning and teaching really made me think.

In their everyday study, students must face many problems. We teachers want to know how to react to them. How deeply are teachers able to feel the claims of their students? If we are really thinking about being student orientated, we have to stop listening to our students from the vantage point of teacher and try to listen to them very carefully. As teachers we tend to look at problems from a logical or theoretical point of view. On the outside, I am a teacher who is teaching, but on the inside, the truth is that I am really a learner who wants to learn from the students right in front of my eyes.

One time I had some of my Japanese students write diaries. At the beginning, I was thinking it would be good training in autonomous learning for the students. However, I came to realize that I was the one truly learning from their entries. Now, I am beginning to have doubts that has to be so absolutely teacher centered/orientated. The process of learning belongs to both teachers and students; we need to recognize our mutual frustrations and difficulties. Then we will be able to reach our goals together. Both students and teachers need to have a desire to understand and learn from one another, we both need to have a learners consciousness.

Computer assisted instruction is gradually becoming more and more a part of language teaching. If I may dare to go against the trend, I would like to focus on the aspects of teaching only humans can do.

I hope to keep learning from the voices of Japanese learners in *Learning Learning*.

(All translation by Tracy Tarvin)

INFORMATION ON LEARNER TRAINING SITES IN JAPAN NEEDED

We have received a request from Dr Joan Rubin for assistance in finding language programs in Japan that are doing learner training. If you know of any sites, please contact her at the address below.

"As a Mellon Fellow this year, I am researching the question of "Pedagogical Frameworks for Learner Self-Management" I want to identify a variety of types of sites which exhibit good practices in autonomy instruction. Toward this end I am also looking at the parameters which characterize good instruction (such as measures of autonomy, and measures of the development of increased autonomy). [I am interested in] sites in Japan that have instituted strategy and autonomy instruction and are known to have been doing so for several years (3 or more)"

Dr. Joan Rubin

Mellon Fellow
National Foreign Language Center
Johns Hopkins University
1619 Massachusetts Avenue, N.W.
Washington, D.C. 20036
USA
E-Mail: MELLON2@mail.jhuwash.jhu.edu
FAX 202-667-6907

日本における学習者トレーニングに関する情報を求む

ジョアン・ルビン博士が、日本で学習者トレーニングを取り入れている語学プログラムを探しており、学習者ディベロブメントN-SIGに協力依頼がきました。ストラテジー／学習者トレーニングを3年程度以上行っている機関をご存じの方は、以下のところに直接連絡してください。

「今年度のメロン・フェローとして『学習者の自己管理のための教育的フレームワーク』の研究をしています。その中に、効果的な自律性の指導訓練を行っている種々の機関についての情報も盛り込みたいと考えています。この目的のため、優れた指導を特徴づける要素（自律性やその度合いの向上の測定基準など）も同時に検討しています。日本におけるストラテジーや自律性の指導を3年以上行っている機関があったら、教えてください。」

Dr. Joan Rubin (連絡先は英文参照)

Reports from the Teacher/Learner Development Action Workshops held at Meiji University on May 18th, 1996

教師と学習者のディベロプメントのためのアクション・ワークショップ報告

56 people took part in this half day of action workshops jointly organised by Learner Development and Teacher Education N-SIGs, with the help of Tokyo JALT Chapter and Meiji University. Nine 75-minute action workshops took place in parallel through the afternoon, with a final hour-long bilingual plenary summary/discussion session. The workshops were intended to be participant-centred and to involve experiential learning; our collective first report below explains in more detail the philosophy behind the event, while the following two contributions report on individual workshops.

A Multi-Perspective Genealogy

Richard:

The idea for these workshops came about last year, through the coming together of various people's interests in exploring the interface between learning and teaching, in ourselves and in our students. In organizational terms, members of the Learner Development and Teacher Education N-SIG committees started out (via email brainstorming) with the intention of attempting "a different kind of event", not just for the sake of it, but for specific reasons several of us seemed to agree on.

Cheiron:

Let's try something totally new with formats. I am tired of the usual papers and workshops and demonstrations, aren't you? How can we make the medium the message? How can participants become active generators of ideas from the beginning?

Richard:

I'm also tired of the typical structure of conferences and agree the medium should be the message - we can't get away from "expert-centred" ways of thinking (even if what they're doing / talking about is "learning centred" approaches) unless there's change in the hierarchical *structures* of teacher conferences

Andrew:

Something without speakers or totally participant-centred...

Naoko:

Planning something that's totally different from usual conferences. That was an exciting idea. We also agreed in the very beginning stage that the event would be bilingual to secure equal participation by Japanese and English speaking people...Our project, however, was not without a problem. During the course of e-mail brainstorming which was carried out exclusively in English, I felt overwhelmed by the amount of writing. ... I somehow withdrew from the discussion before we reached a consensus. There was a language barrier which I hadn't known existed. Achieving equality is not an easy task. I wonder what else the Learner Development N-SIG could do on top of everything we've tried to achieve the goal.

Cheiron:

We succeeded in sharing responsibility for planning a conference and in doing it bilingually to an extent that is rare in any multinational group. We showed that a group of Japanese and non-Japanese people all over Japan could organize a conference almost all through e-mail, and largely reach consensus on the goals and process. Some of the problems we had along the way can also be lessons to JALT members in general. As Naoko points out, virtually all the e-mail conversations took place in English. And though we were all committed to bilingualism, few of us are truly bilingual. The burden falls most heavily on those few people who can interpret/translate. Interpretation and translation are especially time- and energy-consuming... Another tendency all of us faced was being able to put off replying to e-mail or making decisions on e-mail in a way we couldn't do in a face-to-face meeting. Perhaps e-mail should be supplemented with at least one meeting at a key time. We need to see each others eyes and hear each other's voices at times to achieve more sympathetic communication.

Andrew:

e-mail to denwa o tsujite, de ironna atarashi koto o kokoromi, takusan no hito ni sankashite moraii, yueki na toron mo so de nai mono mo yarimashita. nihongo o tsukawanakatta ga, takusan no benkyo wa dekiru si, takusan no omoshiroi hito ni sankashite morai, soshite

